

〈調査報告〉

松島トミさんの口承文芸 5

北海道立アイヌ民族文化研究センター

研究紀要

第9号

2003年3月25日発行

大谷 洋一

〈調査報告〉

松島トミさんの口承文芸 5

大谷 洋一

目次	1	まえがき
	2	凡例
	3	ハリギリで舟を作った男のウエベケレ
	3-1	語り手によるあらすじ
	3-2	本文

1 まえがき

本稿は、1922（大正11）年に門別町の厚別川流域で生まれ育った松島トミ氏がウエベケレと呼んでいるアイヌの口承文芸1編のアイヌ語テキストとその日本語訳である⁽¹⁾。

この物語を要約すると「イシカリ⁽²⁾の奥の村で一人息子として生まれた少年が両親に大事に育てられて成長した。いろいろなことを父親から教わって一人前になると、カツラの木の舟とハリギリ（センノキ）の木の舟を作った。ハリギリの舟は重たくて扱い難いので、軽いカツラの舟ばかりに乗って仕事をしていた。すると、いつの頃からか真夜中になると、舟着場で大きな物音がするようになった。ある日、男が物音のする方へ見回りに行くと、二つの舟が立ち上がって取っ組み合っているのを見てしまった。恐ろしかったので家に帰って寝ていると、そばにカツラの木の女神が立って「ハリギリの木は精神が悪いので毎晩喧嘩をしかけてくる。ハリギリの舟とそれを切り出した根を全て燃やしてしまいなさい。そうしないと悪いことが起きる」と言った。そこで父親に相談して、カツラの木の女神の言うとおりにした。それを燃やした煙が海のほうへ流れていったことを父に報告すると「4年間は海の仕事をするな」と言われた。4年目に入ってカツラの木の舟に乗って海獵に出かけると、海面が沸騰したように泡だって化け物が浮かび上がって襲ってきた。タコの神様に助けを求めたがタコの神様は化け物に負け、次に助けを求めた海の神様と化け物が闘っている間に

(1) 松島氏から採録した口承文芸を筆者はこれまでに、当センター研究紀要の1号（1995年）で3編、6号（2000年）で2編、7号（2001年）で1編、8号（2002年）で1編の計7編を報告してきた。松島氏の紹介は当センター研究紀要第1号で行っている。

(2) 本稿では、イシカラ Iskar の日本語訳を「イシカリ」と統一して表記した。松島氏はこの家族が住んでいる所をあらすじでは「イシカリという村の近く」、アイヌ語本文では「イシカリの奥」と述べている。

命からがら浜へ逃げ帰った。ところが、化け物の呼気を浴びていたために体毛が抜けて足も腐ってしまった。化け物のような姿になった今は、村人に養われて細々と暮らしている。これからの若者は精神の悪いハリギリの木で舟を作ってはならないぞ⁽³⁾」という内容を男が自叙する形式を持った散文説話である。

松島氏がこのウエベケレを語り終えた後の解説や日本語によるあらすじの中で、「タランボ」という樹木の名称を用い、アイヌ語原文ではアユスニ ayusni 「トゲの多くある木」といつている。この樹木について、松島氏は、色が白いものと赤いものの二種類があり、特に赤みのさしたタランボからアユスニ イナウ ayusni inaw というものを作って魔除けに用いたという。採録時に同席していた同町出身の鍋沢キリ氏も同じことを言われている。普通、タランボとは「タラノキ」の別名として用いられているが、松島氏と鍋沢氏はタラノキ以外のトゲのある樹木も含めて呼称している⁽⁴⁾。このタラノキをアイヌ語では一般的にアユスニと呼称しているが、若木の頃はそっくりの形をしているハリギリも同じアイヌ語名称を持っている⁽⁵⁾。松島氏と鍋沢氏の言うとおりに赤味をさした心材や芽を持つのはハリギリの方である。また、北海道ではハリギリの直径は1 mに達するがタラノキの直径は18cm程度にしかない⁽⁶⁾ので丸木舟を作ることはできない。このようなことから松島氏がこのウエベケレで「アユスニ (タランボ)」と称した樹木を筆者はハリギリと判断した。松島氏があらすじなどでタランボと述べた箇所はそのまま記したが、筆者の記した註解や日本語訳は「ハリギリ」としている。

この散文説話の類話は、沙流川流域の出身者である平目カレピア⁽⁷⁾、平賀さだも⁽⁸⁾、上田トシ⁽⁹⁾などが語った3編のほか、沙流川から遠く離れた網走郡北見市(旧網走郡美幌町野崎)で菊池クラ⁽¹⁰⁾が語った1編の計4編の語りが記録されている。沙流川筋の伝承は主人公を「若者」とし、舟材の樹木も「カツラ」と「ハリギリ」の同じ名称で語っているが、北見市の伝承は主人公を「オタシドンクル (歌棄人)」と呼び、樹木が「カツラ」と「ヤチダモ」という組合せで語っている点などが異なる。

松島氏の語った伝承は沙流川筋の伝承と主人公や樹木などが同じ名称である。多少の相違点をあげれば、沙流川流域の伝承で主人公が父親から海の仕事を禁じられた年数が「6年間」となっているところを、松島氏は「4年間」と語っている箇所である。また、化け物から主人公を助けようと

(3) カツラとハリギリの舟について、本田優子による詳しい報告がある。本田優子「ハリギリの丸木舟 民族誌資料/考古資料/口承文芸資料にもとづく一考察」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要第4号』北海道立アイヌ民族文化研究センター、1998年。

(4) 前掲では、「アイヌ民族博物館所蔵上田トシ氏音声資料12」中で上田トシ氏がアユスニのことをタランボの木のことだと述べている箇所について、前後の文脈からハリギリを指していると推測している。

(5) 知里真志保『分類アイヌ語辞典 第1巻植物篇』日本常民文化研究所、1953年、P70

(6) 宮部金吾・工藤祐舜『普及版 北海道主要樹木図譜』北海道大学図書刊行会、1986年。ハリギリについて PP162—163、タラノキについて PP166—167。

(7) 久保寺逸彦『アイヌの昔話』三弥井書店、1971年、P222。

(8) 萱野茂『ウエベケレ集大成』アルドオ、1974年、P139。

(9) 財団法人アイヌ民族博物館所蔵「アイヌ民族博物館所蔵上田トシ氏音声資料12」、1996年採録。まだ文字化されていないが主人公や樹木名称については本田前掲に記載。

(10) 更科源蔵『アイヌ民話集』みやま書房、1981年、P267。编者による要約である。

した神が二度現れる場面では、最初にアッコル カムイ at kor kamuy 「タコの神様」が現れる点が共通しているが、その次に現れる神の名称が異なっている。沙流川流域の伝承はレプンソッキ エプンキネ カムイ repun sotki epunkine kamuy 「沖の海棚を守る神（動物の名称は不明確）」やタミベクル tam ipekur 「シャチ」などであるが、松島氏の場合はアトゥイ コロ カムイ atuy kor kamuy 「海を支配する神」（別名：アトゥイ コロ エカシ atuy kor ekasi 「海を支配するじいさん）」という神が登場する。松島氏は、この神がどのような姿をしているのか「わからない」と言われている。

松島氏の語る口承文芸でアイヌ語の発音に次のような特徴がみられるので列記する。

- ① 接続助詞「…して」をヒネ hine を「イネ」や「ネ」と発音することが多い。
- ② 接続助詞ヒケ hike 「…したところ」をイケと発音することがある。
- ③ 名詞マツ mat 「女」をマツと発音することが多い⁽¹¹⁾。
- ④ 人称接辞ア a = 「私（たち）が・の」、イ i = 「私（たち）を・に」、エ e = 「お前が・の」と語頭が母音の単語と接した場合、声門閉鎖音が入ることが多い。

このウエベケレの伝承と採録の経緯は以下のとおりである。音声資料は北海道立アイヌ民族文化研究センターが保管する。

- ① 1935（昭和10）年頃、門別町厚別川流域で同町出身の老人から松島トミ氏が聞いた。
- ② 1998（平成10）年3月29日、門別町豊田にて松島トミ氏から本報告のアイヌ語本文（約24分間）を筆者が録音した。その際、同町出身の幼なじみである鍋沢キリ氏が同席し、聞き手としてところどころで相槌を入れている（音声資料 CC000394）。
- ③ 2001（平成13）年11月30日、門別町厚賀にて松島トミ氏から日本語訳（約13分間）を筆者が録音した（CC001188）。その際に本報告のアイヌ語本文を録音したテープを予め本人に聞かせている。

本稿を査読していただいた方々から、筆者の誤記や文法的な解釈の誤りなど数多くの指摘を受けて訂正を行った。その指摘により、修正を行ったところには注記でその旨を明らかにした。筆者は査読用の原稿を提出した後、音声資料を二度聞きなおして誤記と聞き取りの誤りを修正した。不完全な査読用原稿を提出した筆者の態度を今後は改めたい。

ウエベケレを聞かせていただいた松島トミ氏をはじめ、原稿を査読してくださった方々には多くのアドバイスをいただいた。深く感謝申し上げる。

(11) この散文説話の中に mat は一語しか出てこない。

2 凡例

アイヌ語の基本的なローマ字表記は、社団法人北海道ウタリ協会が企画・発行した『アコロ イタク AKOR ITAK [アイヌ語テキスト1]』(1994)の表記にほぼ同じである。多少の異なる点及び配列、記号等について以下に記す。

- (1) 本文は二段組として、左側にアイヌ語による語りの部分、右側にその日本語訳を記した。
- (2) アイヌ語のカタカナ表記は、なるべく実際の発音に近いように記した。そのため、音節末のsは小文字の「シ」や「ス」を使い、音節末のrの場合は小文字の「ラ、リ、ル、レ、ロ」を使って表記した。その他、必要と思われる情報は註に記した。辞典類を参照する場合は、ローマ字表記で目的の語を引いてほしい。
- (3) アイヌ語のローマ字表記は、音素交替によって変化した音や“わたり”の音とみなしたものを記さなかった。

例：ポイセタ アンマ pon seta an wa。イヨマッパ i = omappa。

- (4) アイヌ語のローマ字表記では、声門閉鎖音を表す「'」を記さなかった。特に強く区切って発音された箇所は注記した。
- (5) ローマ字表記の大文字は日本語、小文字はアイヌ語である。地名の場合は語頭のみ大文字とした。カタカナ表記では、アイヌ語原文中の日本語をひらがなで記した。
- (6) 語り手以外の発言や補足事項を〔 〕内に記した。
- (7) 語り手の言いさしとみなしたものは、カタカナ表記に示して、ローマ字表記ではなるべく省いた。
- (8) 現時点で解釈が不確実な語句についてはその語尾に「??」を付けた。

3 ハリギリで舟を作った男のウエペケレ

3-1 語り手によるあらすじ

ふーん、イシカリちゅうとこの、コタン [kotan 集落]、近いとこで、
ふー、ふた親に一人息子で、ふた親と育っていて、
ちっちゃい時から何でも上手で、親に教わってやー、
そして、もう出来ないものないくらい、もう、
ちっちゃい時から何でも作るの、好きで、そやって教えてもらってや、
して、そういうふうにしてた、大きくなる次第になお、
もう何でも出来るもんだから、そして、いい若い者になってきて、
そしてからこんど、舟作ったんだ。舟作って、
先にラン、ランコ [ranko カツラ] の木で、舟作って、

そして、こんど次に、こんど、タランボ〔ハリギリ〕の木で、
また舟作って、したんだけど、その舟が重たくて重たくて、
もう、乗って歩くこともできない—もんだから、こんど、
そのランコの、木でばかり、舟ばかり乗ってや、
海さ行ったり—、そういうふうにして—、いたん—んだけど、
こんど、途中から、こんどどうなったもんだか、
夜になればもう、みんな寝た頃になれば—、
舟ぶつかる音でもう、ひっとい音するんだけど、
行ってみれば、まだつな…、その海辺さ降りてみれば
舟つないであるんだから、なんでそうなるんだかもわからん、
もう不思議だけど親さも言うもしないで、そして、
毎晩なれば、そやってしている、もうもうもう、
ある晩に、なお、もうひどいから、こんど、
まだ夜中にこそと行って、見たけ、人間立ってるみたいに、
もう、その舟が立って、もう、取っ組み合いしてる、
つながれてる舟だったのに、そしてもう、取っ組み合いにかって、
もうもうもう、こんどもう、どうしたらいいもんだかわからない、
自分もおっかないやら、いろいろな、気持ちでこんど〔咳払い〕、
は一、家さ戻って来て、したけどもとっても、もう寝られなくてや、
腹立って寝られなくて、いたけ、眠ったんだか、
うとらうとら〔うつらうつら〕したけ—、それこそ神さんみたいな、
きれいな若い女の人が、そばに立っていてこんど〔咳払い〕、
は一、タランボの木ぐらい—、意地の悪い木ないのに、
どうしてそんなの作ってから、もう毎晩、自分さ、
だはんこき〔文句をつける〕して、だはんこきして、
もうどうすることも出来ない、もう女だから自分は、
ランコって女なもんだから、どうすることも出来ない、
もう、今にも負けそうんだけど、もう負けなくて、もう頑張って、
そして、したからそのまんま、おいたら、とっても、あんたたちも悪いから、
したから、明日はもう、みんな焼いてしまえって言われ、
ランコの、その、女の人に言われて〔咳〕、木っ端もみん—な残さないで、
きれいに〔語り手が水を飲む〕、焼いてしまわなかったら、
後々悪いからって言われて、こんど、その女の人、いなくなってしまった、
あ—、もうもうもう、腹立って、どうもならないけども、
明りく〔明るく〕なるの待っ、とおしくて〔待ち遠しくて〕、

よいやく、母親起きて、ご飯の支度してる、もんだから、
こんど起きて、したうちに、父親も起きて、きたから、
こうこう、こういう、わけだちゅうこと言って、したけー、
それならみんな、そのタランボぐらいー、ほんとに心底から、
こ汚いー木ないもんで、したからー、あれだって、もうきれいに、
木っ端もみんな、燃やしてしまえーって言われて、
父親にもそう言われたもんだから、こんどー、浜さ降りて、
こんどその、タランボの舟ぶっ壊してー、こんどみんーな焼いて、
木っ端もなんーも残らんく、みんな焼いてしまっ、
それから家さ来て [咳払い]、こんど、ご飯食べたりして、
そしてこんど、山さ行って、その、はー、木切った根っこー、
こんど掘って、それも、やえ、焼かんばないっだけ、
その最後の煙、どこさ行くか、お前見れ、見れよ、しっかり [咳払い]、
天さ上がるか、海さ行くか、しっかり見れよーって言われて、
したもんだからこんど、山行って、こんどその根っ株を覚えてるもんだから、
掘って、もう、とよくさ行ってー [遠くに伸びている]、
根っこでもみんーな残さないで、きれいに掘って、そして焼いて、
そして、その煙、最後の煙がどこさ行くか見てたけ、
天さ上がるようなかっしたのに、こんど、海さ、
その最後の煙が行ったの見て、こんどそれから、帰って [咳払い]、
来て、したけー、どこ、どっちさ、その煙行ったーって言うから、
こういうふうに、天さ上がるようにしたのにこんど、
海さ最後の煙行ったんだーって言ったけ、したら、
その3年も4年もお前、海さ行けないから、
絶対行ったら駄目だからなって、父親に言われて、
いたんだけども4年目に [咳払い]、入る、
山さ行ったり、川さ行ったりしていたけど、
海さは行かんでいて、いていて、そして、
とうとう4年目、さ、入ってからこんど、はー、
イシカリのあの若い者一人、連れて、こんど海さ行っだけ、
そのランコの、舟乗って行って、してもなんーも魚も、捕れない、
一匹の魚も捕れないで、どっこまで行っても、そして捕れないもん、だから、
したらもう、もう、どうもならんから、戻るかちって、
舟曲げる途端にこんど、海がもうもうもうもう、
お湯でも煮立ってるみたいに、もう、くらくらくらくらして、

そしてもう、びっくりこいてしまって、したけ一、それこそ
 耳の、とこまで裂けたみたいなの、もう真っ赤になった口した化け物、
 現れて、そしてぼっかけるもんだから〔追ってくるから〕、こんど、
 舟漕いで逃げて、逃げて、今に今にその舟引っ張られるようになって〔咳払い〕、
 来る、こんど、昔の孫婆から、孫エカシ〔ekasi じいさん〕から、みんな、
 あの神さん頼んであれした、神さん助けてくれて、そう言って、
 その神さん出てきてこんど一、は一、相撲とったんだけども、
 その間、なんも〔いくら〕逃げて逃げて、してもう、こんどその、
 助けに出た神さんもやられたらしくて、こんどまたその化け物、
 ぼって〔追って〕来て一、もうもう、今にも今にも舟捕まれるような、
 あれで、したら、もう、どうもならんもんだから、こんど〔咳払い〕、
 海の神さんに、頼んで、海の神さん、それこそ先祖から、い、祈る、だか、
 カムイノミ〔kamuy nomi 神に祈る〕してもらったんだから一、
 祝ってもらった神さん、助けてくれ、こう、こうだからちって言って一、
 カムイノミしたんだと、そして、から、は一、したけほんとに、
 その、か一、あの神さん出てきて、その、ふ一、
 化け物と取っ組み合いしてるの見ながら、こんど、
 もうもうもう、無我夢中で、そして、は一、そのイシカリさ、
 戻り、戻りたくて、して、もう近わい、浜近いな一と思ってして、
 したけ、みんな、あ一、出向かいに出て、年寄りから若い者から、
 みんな、したから、おっきい声で、若い者、戻れ一、戻れちって、
 叫んで叫んで、そして、その〔咳払い〕、若い者ら戻って一、
 年寄りだけ残って、そしてもう浜近くなったのわかって、わかってから、
 自分どうなったもんだか、全然わからんくなってしまって、
 そして〔咳払い〕、こんど、3年だか4年だか、たってみ、したけ、
 自分もそれこそ、その化け物、ぼって来た化け物みたいにもう、
 髪の毛もなくなる一、髭もなくなる一、もうもう、
 何にもかんにもそれこそ化け物みたいな格好になってしまって、
 もうもう、肉はみんなとけてしまったもんだか、
 どうなったもんだか、まるっきり、
 もうほんとに化け物みたいな格好になってしまって、
 気づいたら、そんなになってるもんだもん、だからこんど〔咳〕、
 親たちはもう、山さも行けない年寄りなもんだから、
 近所の人ら、肉、山行って、肉とってきて、
 家の前さ、置いて行けば一、それ年寄りら、持って入ってや、

た、焚いて自分に今まで、養っていてくれたらしくて一、
 そして、したら、いるうちに、一人の若い者入って来て、
 お前いったい、人一倍器量いいくて一、した若いもんであったのに、
 どうして一、何してこんなことになったんだ一って聞かれて、
 したから、こうこうこうで、舟作ってみたくて、舟作っただけ、
 ランコの〔咳払い〕、木と、アユヌニ〔ハリギリ〕と一に、
 舟作っただけ、もう、ラン、、だか、アユヌニはもう、タランボは、
 ふふ、どうしてもアイヌ語さ、はっはははは…
 タランボは、くらい一、神さんのうちに〔神々の中で〕、
 いっちばん意地の悪い神さん、木で、そして、いたもの、
 それ、わからないで舟作って、その罰当たったんだちゅって、
 〔語り手が水を飲む〕その若いもんさ教えて、したから舟作っても、
 そうゆうの作らないで、ば、いいからちゅうこと教えて、
 そ一して、ほんとにほんとに、もうもう、ひっとい目にあって、
 もう、若いのに嫁さんも持たないで、もう、
 こんな格好になってしまった一もんだから、
 今の人はどんなことあっても、そのタランボの木っていうものは、
 もう、ほんとに悪いときにしか使わないもんだから、絶対、
 それはおもちゃにしたりも出来ない、もんだから、
 それだけお前とわかっておけよって言って、は一、
 オンネアン〔onne=an 私が老いた〕⁽¹²⁾ したちゅうの。

3-2 本文

イシカル エトコー タ

Iskar etoko ta

イシカリの奥に⁽¹³⁾

アウヌフ アン ア、アオナハ⁽¹⁴⁾ アンイネ⁽¹⁵⁾

a=unuhu an a=onaha an hine

母と父がいて

(12) 松島氏はこのあらすじを語った直後、主人公がオンネ onne「老いる。死ぬ」したことについて「年いった一ちゅうことだんだべな」と言われた。

(13) この日本語訳を筆者は「イシカリの先に」と記していたが査読者の指摘により修正した。

(14) アウヌフ a=unuhu「私の母」の人称接辞アとウ、アオナハ a=onaha「私の父」の人称接辞ア a=とオ oの間にはっきりした声門破裂音がある。以下に同様の発音が多い。

(15) アンイネ an hineのhiが弱まりアンネのようにも聞こえる。松島氏がアンイネをゆっくり発音するとアンヒネというが、口承文芸の語りの中ではアンイネやアンネと発音することが多い。

オカアンペ アネイケ⁽¹⁶⁾

oka=an pe a=ne hike

シネポ アネイネ シネ ワラシ

sine po a=ne hine sine WARASI

アネイネ アナンペ ネクス

a=ne hine an=an pe ne kusu

アオナハ アウヌフ エアリキンネ

a=onaha a=unuhu earinne

イヨマップ、ナ ポニ アニワノー

i=omappa, na pon hi an hi wano

カムイノミ ネ ヤッカ

kamuynomi ne yakka

ウサ オカイペ アカルペ

usa okay pe a=kar pe

イイエパカシヌ⁽¹⁷⁾ ネクスー

i=epakasnu p ne kusu

オッカヨ カルペ アナク

okkayo kar pe anak

ネ⁽¹⁸⁾ アエアイカ⁽¹⁸⁾ カ ソモキノ

nep a=eaykap ka somo ki no

[鍋沢：うん。]

[咳払い] アナンー ヘカチ アネイネ

an=an hekaci a=ne hine

たんだん ポロアンー ペネクスー

TANDAN poro=an pe ne kusu

ポー ヘネ アオナハ アウヌフ ウタラ

po hene a=onaha a=unuhu utar

ヤ、エヤイコブンテッパ⁽¹⁹⁾ ワ、ネ⁽¹⁹⁾ネヤッカ

eyaykopuntekpa wa nep ne yakka

私は暮らしていたところ、

一人っ子の男の子が

私であったので

父と母はとても

私をかわいがった。まだ幼い頃から

神を祭ることも

いろいろなものを作ることを

私に教えてくれたので

男のすることは

なにを出来ないということもなく

暮らしていた男の子となって

だんだんと私が成長したので

なおいっそう両親は

喜んでなにもかも全て

(16) アネイケ a=ne hike は h が聞こえない。

(17) 本文に記したイイエパカシヌ i=epakasnu のカタカナ表記を筆者はイエパカシヌと記していたが査読者の指摘により修正した。

(18) アエアイカ⁽¹⁸⁾ a=eaykap の人称接辞ア a=とエ e の間に声門破裂音がある。以下も同様の発音である。

(19) エヤイコブンテッパ eyaykopuntekpa の語頭のエ e は発音が短い。

イイエパカシス、 ネプネヤッカ

i=epakasnu, nep ne yakka

私に教えた。なんでも

オラ アー エアシカイ ペネクス

ora a=easkay pe ne kusu

それからは、私が上手になったので

イヨムヌレ⁽²⁰⁾ パ コロ、は一、

i=omunnurepa kor,

私を誉めながら

[鍋沢：うん。]

アオナハ トウラノ エキムネアンー ヒケカ、

a=onaha turano ekimne=an hike ka

父と一緒に山へ狩に行っても

は一、イネアツ クスー イソナン ワ

ineap kusu ison=an wa

なんとまあ、獲物に恵まれて

アナン ナカ⁽²¹⁾ アエラムシカリノー

an=an ya ka a=eramuskari no

見たこともないほどに

イソナン、 ペネクス

ison=an, pe ne kusu

私がたくさんの獲物をとったので

ポー ヘネ アオナハ イヨマツ コロ、

po hene a=onaha i=omap kor,

なおいっそう父が私をかわいがると

イ、イコプンテッ コロ、ウトウラアン ワ

i=kopuntek kor utura=an wa

私のことを喜んで連れ立って

エキムネ したり、アトゥイー イラマンテ⁽²²⁾

ekimne SITARI, atuy iramante

狩猟をしたり、海の漁を

アキ したり キーコル パーテッ

a=ki SITARI ki kor patek

してばかり

オカアンペ ネ イケ

oka=an pe ne hike

暮らしていたところ、

たんだん ポロ アニネー

TANDAN poro=an hine

だんだん大きくなって

(20) イヨムヌレパ i=omonurepa の単数形オムヌレ omunnure をアイヌ語の沙流方言及び千歳方言でオモンヌレ omonnure というが、松島氏はオムヌレ omunnure と発音する。

(21) アナン ヤカ an=an ya ka がナカに近く聞こえるのは、ヤ ya の前のン n の口の形が残ったまま、y を落として発音したためと思われる。

(22) 筆者が松島氏に「アトゥイ イラマンテ atuy iramante とアトゥイ ラマンテ atuy ramante のどちらが正しいのか」と質問すると、「どちらでも意味は通じるが、ここではアトゥイ イラマンテと言った」という主旨で答えられた。当研究紀要8号の報告「松島トミさんの口承文芸4」の中で松島氏はアトゥイラマンテ アキ atuyramante a=ki「海猟を私がする」と言っている。そのときに確認した時はアトゥイラマンテアン atuyramante=an「私が海猟をする」と自動詞の形で表現した。

オッカヨネー アナン ペネクスー	
okkayo ne an=an pe ne kusu	一人前の男になったので
ネッ ネヤッカ アカンススイ ワ	
nep ne yakka a=kar rusuy wa	なんでも作りたくなくて
アカルペ ネ ヒケ、はー、	
a=kar pe ne hike,	作っていたところ
ヘントムアニタ チッ アカン、ル ワー ⁽²³⁾	
hentomani ta cip a=kar wa	いつの頃からか、舟を作って
インカラアン ルスイ クス [咳払い]、はー、	
inkar=an rusuy kusu	みたくなったので
ランコ チッ アカン ルウェネ	
ranko cip a=kar ruwe ne	カツラの舟を作ったのであった。
ランコ チッ アカン ヒネ、ケ、 ⁽²⁴⁾	
ranko cip a=kar hike,	カツラの舟を作ったところ、
エアリキンーネ コスネッ ネクス	
earkinne kosne p ne kusu	とても軽かったので
アーエニタン ⁽²⁵⁾ ワ、アトゥイ オルン ネヤッカ	
a=enitan wa atuy orun ne yakka	船足が速くて、海であっても
アオ ⁽²⁶⁾ ワ オマナン、ナンコロ ⁽²⁷⁾	
a=o wa omanan=an kor	乗って行き来しながら
オカアンペ アネ ヒケ [咳払い]、ふー、	
oka=an pe a=ne hike, ,	いたところ
ヘントムアニー タ こんど ランコ、	
hentomani ta KONDO ranko,	いつの頃からかこんどは
ランコでない、アユスニ チッ	
ranko DENAI, ayusni cip	ハリギリの舟を
マカンベ ⁽²⁸⁾ クス アカンススイ ワ	
mak an pe kusu a=kar rusuy wa	どうしたわけか作りたくなくて

(23) アカラ ワ a=kar wa の言い損ないと思われる。

(24) ヒケ hike の言い損ないと思われる。

(25) アーエニタン a=enitan の人称接辞ア a=とエ e の間にはっきりした声門破裂音がある。この散文説話の中では同じようなフレーズでアエニタン a=enitan とアコニタン a=konitan の二つの語形があらわれる。

(26) アオ a=o 「私が…に乗る」の人称接辞ア a= とオ o の間にはっきりした声門破裂音がある。この物語中のアオ a=o は全て同様の発音である。

(27) オマナン、ナンコロはオマナナンコル omanan=an kor の言い損ないと判断してローマ字を記した。

(28) マカンベ mak an pe のベ pe はベ be と発音されている。

アユスニ チヲ アカル

ayusni cip a=kar

ハリギリの舟を作った。

[鍋沢：うん。]

アクス ネー アユスニ チヲ エアリキンネ

akusu ne ayusni cip earkinne

するとそのハリギリの舟はとても

シパセ ワ、アオ ワ オマナナン カ

si pase wa a=o wa omanan=an ka

重くて私が乗って旅することも

エアイカ⁽²⁹⁾ ヲ エアリキンネ パセ ワ

eaykap earkinne pase wa

できなかった。とても重くて

アコニタン カ エアイカ⁽²⁹⁾ ペネクス

a=konitan ka eaykap pe ne kusu

速く進むことができないので

ネー ランコ チヲ パーテッ アオ ワ [咳払い]

ne ranko cip patek a=o wa

あのカツラの舟ばかりに私は乗って、

アエ、コスネヲ ネクス

a=e, kosne p ne kusu

軽かったので

アエニタン ペネクス、ふー、

a=enitan pe ne kusu

速く漕げるので

アトゥイー ウサヅキ ネ、アオ ワ

atuy usapki ne, a=o wa

海の仕事で乗って

オマナナンー コル、アナンペ

omanan=an kor, an=an pe

行き来していた

アネーヒケ、ヘントムアニ ワノー

a=ne hike, hentomani wano

のだが、いつの頃からか

モコルクルカ アン コル

mokor kurka an kor

真夜中になると

チヲ、ウー⁽³⁰⁾、フム アサ アサ

cip hum as a as a

舟の音がしきりになった。

チヲ ウトモシマ フミ ネ ペコロ

cip utomosma humi ne pekor

舟がぶつかり合う音のように

(29) この行と次の行のエアイカ⁽²⁹⁾ eaykap のエ e とア a の間にははっきりした声門破裂音がある。

(30) ウトモシマ utomosma と言いかけたと思われる。

アシットマノ⁽³¹⁾ カネー、フマス コロ
 asitoma no kane, humas kor 恐ろしいほど音がする中で
 ケスン、ケスクラン オカ アンペ
 kesukuran oka=an pe 毎晩、暮らしていた
 アネー ヒケーカ シニアン⁽³²⁾ [咳払い] はー、
 a=ne hike ka sine an to ta, 私であったが、ある日…
 クンネイ、ク、クンネアン ワ キアクス
 kunne an wa ki akuks 夜になると
 スイ ネノ フマス、アプンノ アオナハ エウン
 suy neno humas, apunno a=onaha eun また、あの物音がした。そっと父へ
 ハウエアナン カ ソモキノ、
 hawean=an ka somo ki no, 話もせずに、
 アイェカ ソモキノ
 a=ye ka somo ki no 言いもしないで、
 ピタル オルン アプンノ サナン ワ
 pitar orun apunno san=an wa 川原へ静かに下りて
 インカラアニケー カ ネ チッ ウタラ
 inkar=an hike ka ne cip utar 見たところ、その舟たちは
 アシリコテ ヒ、ネーノ⁽³³⁾ オカ ワ オカ
 a=sirkote hi neno oka wa oka つながれたままになっていた。

[鍋沢：うん。]

ネブーム も ネパワー も⁽³⁴⁾
 nep hum MO nep haw MO なんの音もなんの声も
 イサムノ オカパ、オロワ
 isam no okapa, orowa ないようだった。そこから
 ホシピアンネ ホッケアン コル
 hosipi=an hine hotke=an kor 帰って横になると

(31) 松島氏は通常アシットマノ asitoma no と発音するが、この散文説話を語る中では全て(計6ヶ所)アシットマノと発音して強調を表している。

(32) 語形はシニアン sini=an「私が休む」であるが、査読者から「シネアント タ sine an to ta「ある日」の言いかけ」の可能性を指摘された。筆者は文脈からその解釈が正しいと判断してローマ字と日本語訳を記した。

(33) アシリコテ ネノ asirkote neno と書いていたところ、査読者から「a=sirkote i neno」と指摘された。筆者は既に「アシリコテ ヒ ネノ a=sirkote hi neno」と修正していた。

(34) 松島氏にゆっくり発音してもらおうと「ネッ フムも ネッ ハウム」と述べた。

スイ ネノ フマシ、コルカ	
suy neno humas, korka	また、例の物音がしたけれども
ネウン アラム カ ソモキノ、	
neun a=ramu ka somo ki no	どうも思わないで
ケスクラン エネ ホク、 ⁽³⁵⁾ モコルクルカ アンコル	
kesukuran ene mokor kurka an kor	毎晩、このように真夜中になると
エネ フマサ フマサ コロカ	
ene humas a humas a korka	しきりに物音がしたけれども
エアリキンネアン ケスクランー	
earkinnean kesukuran	ものすごく毎晩
エネ フマシ ペネクスー	
ene humas pe ne kusu	このように物音がしたので
アエヤモクテッ ⁽³⁶⁾ ネクス、ホプニ ⁽³⁷⁾ 、	
a=eyamokte p ne kusu hopuni,	私は不思議だったので
アプンノ ホプニ アンイネ	
apunno hopuni=an hine	そっと起きて
アプンノ ソイネアン イネ	
apunno soyne=an hine	静かに外に出て
ピタル オルン [咳払い]、ランネ ⁽³⁸⁾	
pitar or un, ran=an hine	川原へ下りて
インカラアニケ ソモ カ エネー	
inkar=an hike somo ka ene	見ると、まさかこのように
インカラン クナッ アラム アイ	
inkar=an kunak a=ramu a hi	見るとは思っていなかったが
ネ アシリコテ チッ ウタル ロシキ	
ne a=sirkote cip utar roski	そのつながれた舟たちが立ち、
アイヌ ロシキ ルウエ ネノー カネ	
aynu roski ruwe neno kane	人間が立っているかのように
オカパ ワ ソナーノ ウトモスマ	
okapa wa sonno utomosma	なって、本当に互いにぶつかりあって

(35) エネ ホッケ ene hotke 「このように横になる」と言いかけたと思われる。

(36) アエヤモクテ a=eyamokte 「私は…を不思議に思う」の人称接辞ア a= とエ e の間にはっきりした声門破裂音がある。沙流方言では通常アオヤモクテ a=oyamokte という語形になる。

(37) ホプニ hopuni と言ってすぐに言い直した。

(38) ラナン ヒネ ran=an hine と書いていたが査読者から「ランネ」と指摘されて修正した。

アルコテルケ、コロ ⁽³⁹⁾ オカ シリ	
arukoterke, kor oka siri	取っ組み合っている様子を
アヌカル ワ エーアリキンネアン	
a=nukar wa earkinnean	私は見て、とても
イシトマアンー、はー、	
isitoma=an,	恐ろしくなった。
ウェンキンラネ イコヘタリテ、	
wenkinrane i=kohetari p,	激しい怒りがわきおこった
キア コルカ エホルカ ホシピアン	
ki a korka ehorka hosipi=an	けれども向きを変えて私は帰った。
キマテッアン ペネクス	
kimatek=an pe ne kusu	私は驚いたために
エ ホルカ ホシピアンーネ ⁽⁴⁰⁾	
ehorka hosipi=an hine	反対に帰って
アウニタ エカンネ、[言いよどみ]	
a=uni ta ek=an hine,	自宅に来て
マカンベ クス エネ、チツ ウタラ	
mak an pe kusu ene, cip utar	どうして舟たちは
アイヌ ロシキ ルウェネノ カネ	
aynu rosiki ruwe neno kane	人間が立ったように
オカパイネ アルコサカヨカル コロ	
okapa hine arukosakayokar kor	なって怒鳴りあいながら
オカイェピ アン ⁽⁴¹⁾ セコル ヤイヌアン コル	
okaype an sekor yaynu=an kor	いたのかと思うと
モコルー ⁽⁴²⁾ カ アエアイカヲノ、へー、	
mokor ka a=eaykap no,	眠ることもできずに
アナン アイーネ モコル ヘ モス ヘ	
an=an ayne mokor he mos he	いたあげく、眠るか起きるか
アキー アクス、ピリーカ ⁽⁴³⁾ カムイ	
a=ki akusu, pirka kamuy	していると ⁽⁴⁴⁾ 美しい神様が、

(39) コロ kor の r に母音 o をつけて伸ばした音である。

(40) ホシピアンイネと記していたが査読者の指摘により「ホシピアンーネ」と修正した。

(41) 松島氏に確認するとオカイベ アン okaype an と言い直した。

(42) モコル mokor の r に母音がついて伸ばした発音である。

(43) ピリカ pirka の r に母音がついて伸ばした発音である。

(44) 松島氏によると、「主人公は眠っており、夢の中に女神が現れたのだ」という。

それこそ カムイ ネクス コラチ アンー

SOREKOSO kamuy ne kus koraci an それこそ神々しい⁽⁴⁵⁾

ポン メノコ イサム タ アス ワ アンネ [咳払い]

pon menoko i=sam ta as wa an hine 娘が私のそばに立って、

[鍋沢：うん。]

タアン オアル わかいもの

“ta an oar WAKAIMONO 「ここにいる全くの若者よ。

イタカン チキー エヌ カトゥ

itak=an ciki e=nu katu 私が言うことを

ピリカノ エヌ カトゥ エネ アニー⁽⁴⁶⁾

pirkano e=nu katu ene ani よく聞きなさい。

アシヌマ アナクネ

asinuma anakne 私というのは、

ランコ チッ アナク メノコー、ネー、

ranko cip anak menoko, ne, カツラの舟というのは女である。

ヘマンタ ネクス、エネ [咳払い]、

hemanta ne kusu, ene, なにゆえにこのような

アユスニ パク ウェンサンペ コル

ayusni pak wensanpe kor ハリギリの木ほど悪い精神を持った

チクニ イサム、ペネヒケ

cikuni isam, pe ne hike 木はないものなのに

パセ ワ アオ カー、オマナナン カ

pase wa a=o ka, omanan=an ka 重くて旅をすることも

エアイカッ チクニ エエラムペウテッノ

eaykap cikuni e=erampewtek no できない木を、お前がわからずに

エネ アユスニ チッ エカル⁽⁴⁷⁾ オラ、

ene ayusni cip e=kar ora, このようなハリギリの舟を作ってから

(45) それこそ カムイ ネクス コラチ アンー ポン メノコ SOREKOSO kamuy ne kus koraci an ponmenoko を「それこそ神様のような若い女が」と日本語訳していたが、査読者から他の報告を参照する必要性を指摘を受けて、田村すず子『アイヌ語音声資料5』早稲田大学語学教育研究所(1988年)に掲載された用例 kamuy ne kus koraci an onne kur「神様と見まがうばかりの立派な老人」と中川裕『アイヌ語千歳方言辞典』草風館(1995年)のカムイ ネクス カムイ コラチ アン メノコ kamuy ne kusu kamuy koraci an menoko「神様なので神のように見える(いかにも神様らしい)」等を参照し、筆者は日本語訳を「神々しい」と修正した。

(46) アニー ani はハニーのようにも聞こえる。

(47) エカル a=kar はrに母音がついてエカルンのようにも聞こえる。

エアリキンーネ イコサカヨカル
 earkinne i=kosakayokar とてもそれが私を怒鳴りつけるようになった。
 ケスクラナンー ⁽⁴⁸⁾ コル イコ サカヨカラ
 kesukuran an kor i=kosakayokar 夜になると私を怒鳴って
 アシヌマ アナク ランコ チヅ
 asinuma anak ranko cip 私はカツラの木の舟の
 メノコ ネヅネクス タネ タネ
 menoko ne p ne kusu tane tane 女であるから今にも
 ア、アマケ、マケタ ノイネ ノイネ
 a=maketa noyne noyne 私が負けそうに
 シッキ コルカ、はー、アリキキアン ワ [咳払い]
 sirki korka arikiki=an wa, なったけれども頑張って
 ケスクラナン コル エネ [話者がお茶を飲む]
 kesukuran an kor ene, 夜になるとこのように
 アルコサカヨカラ アルコー テルケー コロー ⁽⁴⁹⁾
 arukosakayokar arukoterke kor 怒鳴りあって取っ組み合いながら
 アナンペ アネ クス、
 an=an pe a=ne kusu, いたものだったので
 ネノ エアヌ ⁽⁵⁰⁾ ヤ ヤクネ ⁽⁵¹⁾
 neno e=anu ya yakne そのままにしておいたならば
 ウェン ノイネ、イラムー、 ⁽⁵²⁾
 wen noyne iramu, 悪くなるように思う、
 ウェン ノイネ ヤイヌアン ナー
 wen noyne yaynu=an na 悪い予感がするぞ。

ニサッタ ネー エホプニ チキ
 nisatta ne e=hopuni ciki 明日、お前が起きたなら
 ネー アユスニ チヅ エ、ペルパベルパ、あー、
 ne ayusni cip e=perpaperpa, そのハリギリの舟を割って割って、

(48) このコル kor はコロのようにも聞こえる。

(49) コル kor のル r に母音がついて伸びた発音である。

(50) エアヌ e=anu の人称接辞エ e と語頭の母音ア a の間に声門破裂音がある。

(51) ヤ ヤクネ ya yakne の箇所について査読者から「wa ne yakne の言い誤り」の可能性を示唆されたが未確認である。

(52) イラムアン iramu=an 「私が思う」と言いかけたと思われる。

ポロ こっば ポン こっば オピッタ
 poro KOPPA pon KOPPA opitta 大きな木っ端と小さな木っ端を全部
 エウフイカ⁽⁵³⁾ ワ、オラー エオケレ チキ
 e=uhuyka wa, ora e=okere⁽⁵⁴⁾ ciki お前が燃やし終えたら
 キムタ エアラパ ワ [咳払い]、はー、ネー エカイニヒー
 kim ta e=arpa wa, ne ekaynihi 山に行ってその切り株を、
 アユスニ エカイニヒー エ、エプシロトト、
 ayusni ekaynihi e=pusrototo, ハリギリの切り株を掘り起こして
 ハンケ シンリチ トゥイマ シンリチ、オピッタ
 hanke sinrici tuyma sinrici, opitta 近くの根っこと遠くの根っこの全てを
 エプシロトト シネツ カ
 e=pusrototo sinep ka お前が掘り起こして一つも
 エノコシタロ ソモキノ、えー、へーえ [咳払い]
 e=nokositaro somo ki no, 残さずに
 エウフイカ ワ イサム、ナンコン ナー
 e=uhuyka wa isam, nankor na 燃やしてしまうのだぞ。
 ソモ、そう⁽⁵⁵⁾、ネノ エキ ソモキ ヤクン、
 somo, SOU, neno e=ki somo ki yakun, そのようにしなかったら
 ウェン ノイネ イラムアン ナ
 wen noyne iramu=an na 悪いことが起きると思うぞ。
 エラマン セコル ハウエアン コロー
 eraman" sektor hawean kor 覚えておけ」と言うと

[鍋沢：あー、そっかい。ふーん。]

テッ⁽⁵⁶⁾ イネ クリパン ワ イサム、
 tek hine?? kuripan wa isam, ぱっと消えてしまった。

[鍋沢：うん。]

(53) エウフイカ e=uhuyka 「お前が…を燃やす」の人称接辞エ e=の後に声門破裂音がある。

(54) 査読者から e=okere 「お前が…を終える」の人称接辞を表す記号「=」の脱落を指摘されて修正した。

(55) 日本語で「そうしなかったら」あるいは「そうしないと」と言いかけたと思われる。

(56) 通常、松島氏は助動詞テッ tek 「ちょっと…する」を動詞の後に置くので、ここはクリパン テッ kuripan tek 「さっと消える」の言い損ないと思われる。

ロシキ ルウェ ネノ カネ オカ	
roski ruwe neno kane oka	立っているかのようになっていた。
アシリコテ チプ、ネノ オカ ワ、	
a=sirkote cip, neno oka wa,	つながれた舟のまま
アシットマノ アルコテルケ	
asitoma no arukoterke	恐ろしいように取っ組み合う
シリ アヌカルー ⁽⁶¹⁾ したただけでも	
siri a=nukar SITADAKEDEMO	様子を見ただけで
アエキマテッ ワー エホルカ	
a=ekimatek wa ehorka	私はびっくりして逆方向に
ホシピアン ワ、チ、[咳払い]	
hosipi=an wa,	私は帰って
チセ オルン アフナナフ	
cise orun ahun=an a p	家の中に入ったのであったが
メネ ⁽⁶²⁾ 、カムイ メノコ、イビリマ クスー、	
mene, kamuy menoko, i=pirma ⁽⁶³⁾ kusu,	女神が警告するために
エッ ルウェネ セコル アオナハ エウン	
ek ruwe ne” sekor a=onaha eun	来たのです」と父へ
ハウエアナクス ⁽⁶⁴⁾ ハ、イラムガンバレ	
hawean=an auksu “ha, iramkanpare?? ⁽⁶⁵⁾	言うと「大変だ。
ハウエネ チキ、ホクレ エベ、 ⁽⁶⁶⁾	
hawe ne ⁽⁶⁷⁾ ciki, hokure	そういうことなら、早く、
エペルパペルパ エヤサヤサ ⁽⁶⁸⁾ ワー	
e=perpaperpa e=yasayasa wa	それをドンドン割ってバリバリに裂いて
エウフイカ ワ イサム ナンコンナ	
e=uhuyka wa isam nankor na”	燃やしてしまうんだぞ」
セコル ハウエアン、ペネクス こんど	
sekor hawean, pe ne kusu KONDO	と言ったので

(61) アヌカヲ a=nukar の r に母音 u がついて伸ばした発音である。

(62) メネ mene はメノコ menoko 「女」の言い差しと思われる。

(63) 査読者に指摘されて本文中の ipirma を全て i=pirma に修正した。

(64) ハウエアナクス hawean akusu 「彼が言う」とではなく、ハウエアナクス hawean=an akusu 「私が言う」と言うべき文脈なのでそのとおりのローマ字を記した。

(65) 松島氏はイラムガンバレ iramkanpare の意味を「どうするべ、大変だ」と述べた。詳しいことは未確認。

(66) エベ epe と言いよんだがすぐに言い直した。

(67) hawe ne は査読者の指摘で筆者のローマ字の誤記 soyene から修正した。

(68) エペルパペルパ エヤサヤサ e=perpaperpa e=yasayasa は、他動詞のペルパ perpa 「…を破る、…を割る」とヤサ yasa 「…を裂く、…を破る」を反復した語形。

イペアン テッ ナニー、ふー

ipe=an tek nani

ウェンキンラネ イコヘタリ⁽⁶⁹⁾ ネットス

wenkinrane i=kohetari p ne kusu

ぺ、ア、ピタル オッタ サナンネ [咳払い]

pitar or ta san=an hine

ネー アユスニ チッ アペルパペルパ

ne ayusni cip a=perpaperpa

アヤサヤサ、オピッタ こんど アウフイカー

a=yasayasa, opitta KONDO a=uhyuka

私はさっと食事をすましてすぐ、

とても怒りがわきおこったので

ふー、

川原へ下りて

そのハリギリの舟をどんどん割って

ぱりぱり裂いて全てを燃やした。

[鍋沢：ふーん。]

ルッネ こっばー ポン こっばー

rupne KOPPA pon KOPPA

シネッ カ アノコシタロ ソモキノ、

sinep ka a=nokositaro somo ki no,

アウフイカ ワ イサム ルウェネー、

a=uhyuka wa isam ruwe ne,

ヒネ ア、ウフイ オケレッ ネットス [咳払い]

hine uhyu okere p ne kusu

アウニヒ タ エカン ヒネ、タネ

a=unihi⁽⁷⁰⁾ ta ek=an hine, "tane

ウフイ オケレ ワ エカン ルウェネ

uhuy okere wa ek=an ruwe ne"⁽⁷¹⁾

セコル ハウエアナンナクス、

sekor hawean=an akusu,

大きな木っ端と小さな木っ端を

一つも残さずに

燃やしてしまったのであった。

そして燃えてしまったので

自宅に帰って、「今、

燃やし終わって来ました」

と私が言うと

(69) ウェンキンラネ イコヘタリ wenkinrane i=kohetari は、1994年11月30日に松島氏から録音したイヨソルイカという物語の中で妻が夫の浮気に対してひどく怒った場面で用いられている。松島氏は「ヤキモチ焼いたのさ、早いとこいえばな」と説明した（音声資料：CC000325）。北海道教育庁生涯学習部文化編『平成3年度 久保寺逸彦 アイヌ語収録ノート調査報告書（久保寺逸彦編 アイヌ語・日本語辞典稿）』北海道文化財保護協会（1991年）によると「wenkinrane ikohetari 赫と憤って悪霊がついた如く我を狂怒に立たしむ」及び「wen < (悪、荒き、猛々しき) kinra (気狂、狂暴) ne (なる) 動詞が助辞に用ゐられて、その状態の様になることをあらはす i (我を) ko (共に) hetari (顔を起す、起き立つ) 顔をもたげる」と記載。

(70) アウニヒ a=unihi のヒ hi はごく短く発音。

(71) ハウエアナクス hawean=an akusu と言おうとしたがハウエアン hawean のン n の口の形を残したままアクス akusu を発音。

ハウエネ ヤクン エキムネ エアルパ ワ、
“hawe ne yakun ekimne e=arpa wa,
ネ シンリチー、エプシロトトー、
ne sinrici, e=pusrototo,
ハンケー、シンリチ トウイマ シンリチー
hanke, sinrici tuyma sinrici
エプシロトトー ワ、エウファイカ ナンコンナ
e=pusrototo wa, e=uhuyka nankor na
オラー ウファイ オケレ コパッ タ、
ora uhuy okere kopak ta,
スプヤハ ヒナクン アルパー、ヒー ヤ
supuyaha hinakun arpa, hi ya

[鍋沢：ふーん。]

エヌカン ナンコンナ セコル
e=nukar nankor na” sekor

[鍋沢：ふーん。ふん、ふん、うん。]

アオナハ ハウエアン ルウエネ
a=onaha hawean ruwe ne
こんど エキムネアンイネ こんど
KONDO ekimne=an hine KONDO
ネー アユスニー エカイニ アプスロトト、ふー、
ne ayusni ekayni a=pusrototo,
ハンケー、シンリチ トウイマ シンリチ
hanke, sinrici tuyma sinrici
シネーカ アアヌ カ ソモキノ
sinep ka a=anu ka somo ki no
オピッター [咳払い] ポン こっば ポロ こっば
opitta pon KOPPA poro KOPPA
ハムフー オピッター、ふー、アウファイカ ヘー、
hamuhu opitta, a=uhuyka

「とにかくにも、お前が山へ行って
その根っこを掘って
近くの根っこと遠くの根っこを
掘って燃やさない。
それから燃え終わった方で
その煙がどこへ行くのか

を見るのだぞ」と

父が言うのであった。

そして山へ行って

そのハリギリの切り株を掘り返して

近くの根っこと遠くの根っこを

一つも残さずに

全て小さな木っ端も大きな木っ端も

葉っぱも全部燃やした。

とつとつ ウファイ ペネクスー

TOTTOTO uhuy pe ne kusu,

アコニタン ワ オピッタ

a=konitan wa opitta

ア、アウファイカ ルウェネ、ウファイ、

a=uhuyka ruwe ne, uhuy,

タネ ウファイ オケレ [咳払い] コパッ タ

tane⁽⁷²⁾ uhuy okere kopak ta

ネ スプヤ はー、リクン カウン ワ

ne supuya rikunkaun??⁽⁷³⁾ wa

ヘメス ペコロ イキアア こんど

hemesu pekor iki a p KONDO

アトウイ カウン ネー スプヤ シルトウ、

atuy ka un ne supuya sirutu,

[鍋沢：ふーん。]

アルパ ルウェネー

arpa ruwe ne

[鍋沢：ふーん。]

スプヤ アルパ アトウイカウ、アルパ

supuya arpa atuy ka un, arpa

シリ⁽⁷⁵⁾ アヌカン ルウェネ [咳払い]、ペネクス

siri a=nukar ruwe ne, pe ne kusu

こんど、もう ウファイ オケレヲ ネクス

KONDO, MOU uhuy okere p ne kusu

さっさと燃えるものなので、

私はすばやく全てを

燃やした。

今、燃え終わった方向に

その煙が高いところにある天へ

登るようにしていたのであったが

海の上にその煙がずって進み

行くのであった⁽⁷⁴⁾。

煙が海の上に行った

様子を見たので

そしてもう燃え終わったので

(72) tane は査読者の指摘により誤記の tame を修正。

(73) リクンカウ rikunkaun と聞こえた箇所を松島氏に確認すると、リクン カント オルン rikun kanto or un「高いところにある天へ」と言い直したが、リクンカウという言葉も「昔からあった」という。

(74) 松島氏は、「煙が帯のような状態で流れていった」という。

(75) siri は査読者の指摘によりシリ sir を修正。

アウニター サナンネ アクス

a=uni ta san=an hine akusu⁽⁷⁶⁾

自宅へ下がって行くと

アオナハ、ヒナクン スプヤハハー、

a=onaha, "hinakun supuyaha,

父が「どこへ煙が

オリキン セコロ ハウエアン ペネクス

orikin" sekor hawean pe ne kusu

昇った?」と言ったので

タツネ タツネ カネ、アトゥイ オルン

tapne tapne kane, "atuy or un

かくかくしかじかと「海の方へ

シキルー セコロ ハウエアナナクス ふー、

sikiru" sekor hawean=an akusu

なびいて行った」と言う

イラムガンバレー レパ イネパ

"iramkanpare?? re pa ine pa

「大変なことだ。三年、四年は

ソモ アトゥイ ウサヅキ ソモ

somo atuy usapki somo

海の仕事をしては

エキ ナンコンナー ヤク⁽⁷⁷⁾、セコロ

e=ki nankor na" yak, sekor

いけないぞ」と

アオナハ ハウエアン ルウェネ [咳]

a=onaha hawean ruwe ne

父が言うのであった。

[鍋沢：うん。] [松島が水を飲む]

こんど ペツ、⁽⁷⁸⁾ アトゥイ ウサヅキ カ アキカ

KONDO atuy usapki ka a=ki ka

そして、私は海の仕事も

ソモキノー キムター ペトルワー、

somo ki no kim ta pet or wa,

しないで山で、川のところから、

ネ ペコル、キムタ ネ ペコル

ne pekor, kim ta ne pekor⁽⁷⁹⁾

山で

ウサヅキ アキ コル、レパー シラン

usapki a=ki kor, re pa siran,

仕事をして三年が過ぎた。

(76) san=an hi ne akusu は、筆者はサナン san=an 「私が下りる」の後にヒネ hine 「…して」とアクス akusu 「…すると」が並んでいると解釈していたが、サナンヒ san=an hi 「私が下りること」と名詞化されていることを査読者から教示を受けた。

(77) ヤク yak 「(間接話法で用いる) …と (いう)」をセコロ sekor 「と (言う、思う)」に言い直した。

(78) ペツ pet 「川」をアトゥイ atuy 「海」に言い直したと思われる。

(79) ネ ペコル ne pekor について、査読者からコピュラの可能性とネノ neno に似た機能を持つ副詞になっている可能性を指摘された。筆者は誤って「そのように」と日本語訳していたがコピュラとして解釈する。ただし松島氏から未確認なので、ここは ne pekor の日本語訳を外した。

イネパ オッタ アフン テッサマ	
ine pa or ta ahun teksama	四年目に入って
もう イネパー、シランペネクスー	
MOU ine pa, siran pe ne kusu	もう四年がたつ頃なので
もう ビリカ フム ネ、ネ クナク	
MOU pirka hum ne kunak	もうよいだろうと
アラム ワ アオナハ エウン	
a=ramu wa a=onaha eun	私は思って、父へ
ハウエアナン カ ソモキノ	
hawean=an ka somo ki no,	言いもせずに
イネパ すぎて イキ、	
ine pa SUGITE iki,	四年が過ぎてから
レプナンー すれば	
repun=an SUREBA	沖に出れば
いかったけども、ふふふ、ふふ、	
IKATTA KEDOMO, HUHUUHU, huhu,	よかったんだけども
しゃもの ことば はいった、は一、	
SAMO NO KOTOBA HAITTA, HA,	[日本語が入った]
イシカルンー わかいもの シネブ	
Iskar un WAKAIMONO sine p	イシカリの青年を一人
アトゥラ ヒーネ、アシレン ヒネ、は一、	
a=tura hine, a=siren hine,	連れて誘って
アトゥイ ウサヅキ、アキー、	
atuy usapki, a=ki,	海の仕事をした。
ネ ランコ チッ アオ イネ きん、、	
ne ranko cip a=o hine	そのカツラの舟に乗って
ネウン パク、パイェアナ ヤッカ	
neun pak, paye=an a yakka	どこまで行っても
シネ チェーブ カ アエオムケン	
sine cep ka a=eomken	一匹の魚も取れなかった。
エアリキンネ ウェニョクンヌレ アキ コルー ⁽⁸⁰⁾	
earkinne wen iokunnure a=ki kor	とてもあきれて
アトゥイー ずっと レプンー、オルン	
atuy ZUTTO repun or un	海のずっと沖の方へ

(80) コル kor の r に母音 u がついて伸びた発音。

パイェアナアナ ヒケ カ

paye=an a an a hike ka

行ったところでも

シネ チェプ カ アエオムケン

sine cep ka a=eomken

一匹の魚もとれなかった。

エアリキンネ ウェニョクンヌレ アキコル

earkinne wen iokunnure a=ki kor

とてもあきれて

もう ホシピアニケ セコル

“MOU hosipi=an hike” sekor

「もう帰り時だ」と

ハウェアナンコル [咳払い] チプ アエノイエー クス

hawean=an kor cip a=enoye kusu

と言うと、舟の向きを変えるため

イキアナー クスー ソーモカ エネー、

iki=an akusu somo ka ene,

動く、まさかこのように

アトウイ チポイエポイエ チクラクラ

atuy cipoyepoye?? cikurakura??⁽⁸¹⁾ ⁽⁸²⁾

海がかきまざり泡立ち、揺れに揺れて

[鍋沢：うん。]

アシットマノ カネー シリキー、オラー⁽⁸³⁾ [咳払い]

asitoma no kane sirki, ora, ,

恐ろしい状態になった

オロワ ウェンカムイ シプスケ⁽⁸⁴⁾、

oro wa wen kamuy sipusuke,⁽⁸⁵⁾

所から化け物がわき上がった。

[鍋沢：うん。]

ネ アトウイカ チコイ、チコラコラー⁽⁸⁶⁾

ne atuy ka cikoy, , cikurakura

その海面が揺れて

チポイエポイエー ウシケー ワ

cipoyepoye uske wa

かき混ざってところから

(81) 松島氏はチポイエポイエ cipoyepoye について「鍋煮たるみたいに、あれがなるちゅうことだんだ。泡立つことさ」という。アイヌ語沙流方言に、ポイエ poye 「…を混ぜる」の重複形でポイポイエ poypoye がある。

(82) 松島氏はチクラクラ cikurakura を「地震みたいに揺れてるちゅうことさ」という。アイヌ語沙流方言に似た意味のクムラ クムラ kumrakumra 「グラグラする」がある。

(83) オラ ora の直後、オロワ oro wa 「そこから」と言い直した。

(84) シプスケ sipusuke はアイヌ語沙流方言で「ふくれる」の意味であるが、静内方言では「わき出す」である。松島氏は静内方言と同じ意味で用いている。このことは査読者から示唆を受けた。

(85) 査読者の指摘で、orowa 「それから」から oro wa 「…の所から」に修正した。

(86) チコラコラーを松島氏に確認すると「チクラクラ cikurakura」の言い損ないであるという。

ウェンカムイ シプニ ソノーノ シーノ
 wen kamuy sipuni sonno sino 化け物が浮き上がって本当に
 ポロ ウェンカムイ ネ、オコッコ ネ ヒーネ
 poro wen kamuy ne, okokko ne hine 大きな悪い神の妖怪となって
 パロホー カ キサラーハ パク
 paroho ka kisaraha⁽⁸⁷⁾ pak 口から耳まで
 ヤサシケ ア ペコル アンー オコッコー、タ⁽⁸⁸⁾、
 yasaki a pekor an okokko, 裂けたような妖怪は
 フレー サランペ アエクパレヤ ペコル アンー
 hure saranpe a=ekupare a pekor an 赤い布をくわえさせられたようであった。
 ヘマンター シプニー ヒネ こん、
 hemanta sipuni hine KON,、 何かが浮き上がって
 アエキマテック ペネクス
 a=ekimatek pe ne kusu 私たちは驚いたので
 アットムサマ ア、チヲ アエノイエ、ヒネ
 attomsama cip a=enoye hine ひたすら舟の向きを変えて
 キラアンーネ アシットマーノ
 kira=an hine asitoma no 逃げて、恐ろしくて
 チヲ アホユプレ ネ、キラアンーしっても
 cip a=hoyupure⁽⁸⁹⁾ ne, kira=an SITTEMO 舟を走らせて逃げても
 ネ ウェンカムイ イケサンバ ワ、
 ne wen kamuy i=kes anpa⁽⁹⁰⁾ wa, その化け物が追いかけて
 チヲ オソロ タネ タネ カ、ア [咳払い]
 cip osoro tane tane ka 舟尻を今にも
 アキシマ アンキ アンキ シリキ コルカ
 a=kisma anki anki sirki korka もう少しでつかまえられそうになったが
 オラー、エネー ワ ポカ ヤイカレアニー カ
 ora enewa?? poka yaykare=an hi ka そうなってもどうすることも
 イサムペ ネ クスー カムイノミ カ
 isam pe ne kusu kamuynomi ka できなかったため、神への祈りも
 アオナハ イエ、イイエパカシヌー アナンベ
 a=onaha i=epakasnu an=an pe 父から教えられていた

(87) 査読者の指摘で、kisara から kisaraha に修正した。

(88) 査読者の指摘で「タ」の言い指しに対応するローマ字表記を削除した。

(89) 査読者の指摘でホユプレのローマ字表記を hoyupre と記した箇所全て hoyupure に修正。

(90) 査読者の指摘でイケサンバのローマ字表記を ikes anpa から全て i=kes anpa へ修正。

アネヅ ネクス ア、アッコル カムイー
 a=ne p ne kusu, “at kor kamuy
 タヅネカネ、ふー、オコッコ シヅニ ワ
 tapne kane, okokko sipuni wa
 イケサンパ ワ タネ タネ
 i=kes anpa wa tane tane
 チヅ アエシカリ アンキ シリキ ナ
 cip a=esikari anki sirki na
 アッコル カムイー ハポ オルワ
 at kor kamuy hapo or wa
 シンリッ オルワ アノミ ビト
 sinrit or wa a=nomi pito
 アッコル カムイ エネ アナ
 at kor kamuy e=ne a na
 イーシ、イカオビウキ ワ イコレヤン
 ikaopiwiki wa i=kore yan”
 セコル イノイノイタカン⁽⁹¹⁾ コルー
 sekor inonnoytak=an kor
 チヅ アホユプレー、アヅ セコル
 cip a=hoyupure, a p sekor
 ソノーノ チ、チヅ オソロホ
 sonno, , cip osoroho
 シクラクラ⁽⁹²⁾ チポイエポイエ セコル
 cikurakura cipoyepoye sekor
 ヤイヌアナクス オロワ
 yaynu=an akusu orowa
 シヅニ カムイ、アトゥイー カウンカ
 sipuni kamuy, atuyka un ka
 シク マクナタラ ネ ウェンカムイ トゥラ
 sik maknatara ne wen kamuy tura
 アルコーテルケ シリー アヌカルー⁽⁹³⁾、
 arukoterke siri a=nukar,

私であったので「タコの神様、
 このように妖怪が現れて
 追いかけて、ほどなく
 舟がわしづかみにされそうです。
 タコの神様よ、母から、
 先祖から祭られたお方が
 タコの神様のあなたでした。
 私を助けてください」
 と祈りを捧げながら
 舟を走らせたのだが、と、
 本当に舟の尻が
 グラグラと泡立ったと
 思うと、そこから
 浮き上がった神様が海面に
 目があかあかと光っている化け物と
 取っ組み合う様子を見た。

(91) イノンノイタカン inonnoytak=an の言い損ないと思われる。

(92) 松島氏によると、チクラクラ cikurakura をシクラクラと言い損なった。

(93) アヌカ a=nukar のル r に母音をつけて伸ばしている。

シヨカ ⁽⁹⁴⁾ ウン アヌカル コロ	
siyoka un a=nukar kor	自分の後ろを見ながら
チヅホユプレアン、	
ciphoyupure=an,	私は舟を走らせた。
イシトマアン ペネクス	
isitoma=an pe ne kusu	恐ろしいので
チヅ ホユプレアンー、アクス、	
ciphoyupure=an, akusu,	舟を走らせていると
アッコル カムイ ア マケタ ⁽⁹⁵⁾ ワ	
at kor kamuy a=maketa wa	タコの神様が負けて
ネ ノイネ スイ イケサンパ、〔咳払い〕	
ne noyne suy i=kes anpa,	しまったようでまた追いかけて
ネ ウェンカムイ タネ タネ カ	
ne wen kamuy tane tane ka	その化け物が今にも
チヅ オソロー、ア、アキシマ	
cip osoro, a=kisma	舟尻をつかまれ
アンキ アンキ アンキ シリキ コルカ もうー、	
anki anki anki sirki korka MOU,	そうになったけれども
エアラッキンネアンー シキヌ ⁽⁹⁶⁾ アニ ネヤー	
earkinnean siknu=an hi ne ya	本当に自分が生きるか
ライアニ ネヤ アエランペウテッノ	
ray=an hi ne ya a=erampewteknō	死ぬのか、わからなくなって
アエキマテッ ペネクスー こんど スイ	
a=ekimatek pe ne kusu KONDO suy	あわてていたので、こんどまた
アトゥイ コル カムイ アトゥイ コル エカシー	
“atuy kor kamuy atuy kor ekasi ⁽⁹⁷⁾	「海の神様、海の長老よ、
アッコル カムイ アマケタナ 〔咳払い〕	
at kor kamuy a=maketa na	タコの神様が負けました。
シンリッ オルワノ ハポ オルワノ	
sinrit orwano hapo orwano	先祖から、母から

(94) 査読者の指摘でカタカナ表記のシオカを全てシヨカに修正。

(95) 人称接辞ア a=の後に声門破裂音がある。

(96) 1994（平成6）年11月30日の聞き取り調査（音声資料 CC000325）で松島氏は「私がお前を生かしたい」という意味のアイヌ語をアエシクヌレルスイ a=e=siknure rusuyと表現していたが、3年後に採録したこの物語ではシクヌ siknu「生きる。生き返る」をシキヌ sikiinuと発音。

(97) 松島氏にアトゥイ コル カムイ アトゥイ コル エカシ atuy kor kamuy atuy kor ekasiについて質問するとこの神の別名をタマンテ カムイ tamante kamuyと述べたが姿を知らないという。

アノミピトー アトゥイ エカシー エネ ナ	
a=nomi pito, atuy ekasi e=ne na	祭られたお方、海の長老よ。
ホクレ クナッ、うー、イカオピウキ ワ	
hokure kunak, i=kaopiwiki wa	早く私どもを助けて
イコレ ヤク ビリカ ナンコンナ セコロ	
i=kore yak pirka nankor na" sekor	「くださいませ」と
ク、イノンノイタッアン カムイノミアン コル	
inonnoytak=an kamuynomi=an kor	私が祈って拝みながら
チヲホユプレアンー コルー ⁽⁹⁸⁾ 、はー、キア クス	
ciphoyupure=an kor, ki akusu	舟を走らせると
ソンノ カー カムイー シプニー シリー	
sonno ka kamuy sipuni siri	本当に神様が浮かび上がった様子を
こん、ニプナタラ、マクナタラー アトゥイ カ	
KOON, nipnatara ⁽⁹⁹⁾ maknatara atuy ka	あかあかと海面が
チコイラコラ ⁽¹⁰⁰⁾ チク、チポイエポイエ、ヒネ	
cikurakura cipoyepoye, hine	グラグラと湧きかえって
ネ、はー、ウエンカムイ トゥラ アルコテルケー コル	
ne, wen kamuy tura arukoterke kor	その化け物と取っ組み合いながら
オカパ シリー シヨカウン アヌカルー ⁽¹⁰¹⁾ 、テッ、	
okapa siri siyoka un a=nukar, tek	いた様子を自分の後ろに一瞬見た。
イシカルー、ピタルー タネ ハンケ ノイネ	
Iskar, pitar tane hanke noyne	イシカリの石原がもう近いように
イラムアンー アクスー ソンノ カー	
iramu=an akusu sonno ka,	思ったところ、なんと
イシカル ウンー オンネブ ネヤー	
Iskar un onnep ne ya	イシカリの年寄りも
わかいもの ネヤー	
WAKAIMONO ne ya	若者も
トオンノ アルパシテー レパ ワ ⁽¹⁰²⁾	
toonno arupasterepa wa	あちらから大勢で走って

(98) コル kor の r に母音がついて伸びた発音。

(99) 松島氏によるとマクナタラ maknatar の言い損ない。

(100) 松島氏によるとチクラクラ cikurakura の言い損ない。

(101) アヌカ ヌ a=nukar の r に母音がついて伸びた発音。

(102) 査読者からアルパシテ arpaste の r の後に母音 u があることを指摘されて修正。

イカオパシ ワ アルキパー シリ

ikaopas wa arkipa siri

アヌカルー⁽¹⁰³⁾ ペネクス ポロ ハウェア、

a=nukar pe ne kusu poro hawe a,

ア サンケ イネ⁽¹⁰⁴⁾ も、ピタル⁽¹⁰⁵⁾ ハンケー

a=sanke hine pitar hanke

シリ アヌカル ペネクス、けー、

siri a=nukar pe ne kusu,

ペウレ ウタラ ホシッパ ヤン

“pewre utar hosippa yan

ペウレ ウタラ ホシッパ ワ

pewre utar hosippa wa

オンネプタラ イカオパシ ヤン

onnep utar⁽¹⁰⁶⁾ ikaopas yan”

セコル ホトイパ アンー

sekor hotuyipa=an

ライー ホトゥッパアンー ナクスー

ray hotuyipa=an akusu⁽¹⁰⁷⁾

やっぱり スパワ ネ ノイネ

YAPPARI nu pa wa ne noyne

ペウレ ウタラ ホシッパ

pewre utar hosippa

オンネプタラ イカオパシ ワー

onnep utar ikaopas wa

ピタル オルナー アルキパ シリ

pitar or un arkipa siri

アヌカッテク マク イキアニ

a=nukar tek mak iki=an hi

かけつけて来る様子を

見たので大きな声を

出して、もう浜の石原に近い

様子を見たので

「若者たちは帰りなさい。

若者たちは帰って

年寄りたちが来てください」

と私は叫んだ。

私が大声で叫ぶと

それが聞こえたらしく

若者たちが帰った。

年寄りたちがかけつけて

川原にやって来た様子を

さっと見た。どう行動したのか、

〔鍋沢：うん。〕〔松島：咳払い〕

(103) アヌカラ a=nukar の r に母音 u がついて伸びた発音。

(104) 査読者の指摘でカタカナ表記をヒネからイネに修正。

(105) ビタル pitar 「石原」の r に母音 u がついて伸びた発音。

(106) 査読者の指摘でウタリ uteri をウタラ utar に修正。

(107) 査読者の指摘でホトゥイパアンー ヒナクス hotuyipa=an hi akusu をホトゥイパアンーナクス hotuyipa=an akusu に修正。ナクスと聞こえるのは、akusu の直前にある n の口の形が残っていたためである。

チセ オルニー、ヤナン ヒ ネヤー	
cise or un, yan=an hi ne ya	家の中に上がっているのか、
アトゥイ オルン オシ、ハチリ ⁽¹⁰⁸⁾ アニ ネヤー	
atuy or un hacir=an hi ne ya	海にころんでいるのか、
マッカ イキ アニーカ アエランペウテク	
mak ka iki=an hi ka a=erampewtek	私がどうしたことなのか、わからない
アイーネ [咳払い] シキヌアニ ネヤ	
ayne siknu=an hi ne ya	あげく、生きているのか、
ライアニ ネヤー アエランペウテクノ	
ray=an hi ne ya a=erampewtek no	死んだのか、私はわからずに
レパー カ ネノ アナン [咳]	
re pa ka neno an=an,	三年もそのようになっていた。
アウヌフー アオナハー オンネ [水を飲む]	
a=unuhu a=onaha onne ⁽¹⁰⁹⁾ ,	私の父母が、老いた
アウヌフ ウタラ イカオフフイエ ⁽¹¹⁰⁾ コロー	
a=unuhu utar i=ka huye?? kor	母たちが私を看病しながら
ネ レパー カ [咳払い] タネ イネパー	
ne re pa ka, tane ine pa	三年も、今は四年
オロ アフン ラポク タ はー、	
oro ahun rapok ta	になった頃に
ヤイエシカロクンカ アン ルウェネ [咳払い]	
yayesikarunka=an ⁽¹¹¹⁾ ruwe ne	意識を取り戻させてくれたのであった。
ネ インー、インカヲアニケー ソンーノ	
ne inkar=an hike sonno	私が見たところ、本当に
ホブニアン カ モイモイケアン [咳]	
hopuni=an ka moymoyke=an	起きることも動くことも
ああ、もう [咳] アコヤイクシノー	
AA, MOU, a=koyaykus no	全くできなくなって
それこそー、アチキリヒー カムカー、	
SOREKOSO a=cikirihi kamu ka,	それこそ、自分の足の肉も

(108) 査読者の指摘でハチリ haciri をハチリ hacir に修正。

(109) このオンネを筆者は次のアウヌフ ウタラ a=unuhu utar 「私の母たちが」を形容していると解釈した。査読者から指摘を受けるまではオンネ onne 直前のアウヌフ アオナハを主語にとると解釈していた。

(110) イカオフフイエと聞こえるがイカフイエ i=ka huye 「私を看病する」を言い損なった可能性がある。未確認。

(111) 松島氏によると、ここはヤイエシカルンカ yayesikarunka 「気づかせる。教えさせる」の言い損ないである。北海道教育庁生涯学習課編『平成3年度 久保寺逸彦 アイヌ語収録ノート調査報告書』(1991)に「ヤイシカルン yaishikarun 目がさめる」、「アコヤイシカルン akoyashikarun」の記載。

ウコムニナー ヒ ネヤー

ukomunin hi ne ya

オピッタ ハチリ ワ イサム、から、ヒケー

opitta hacir wa isam, KARA hike

アシキラ⁽¹¹²⁾ ヲ カ イサム

a=sikrap ka isam,

アラルフ カ イサム

a=rarhu⁽¹¹³⁾ ka isam

ア、アサパハ ヌマハ カ イサム

a=sapaha numaha ka isam

アレキヒー カ イサム

a=rekihi ka isam

ソナーノ マク、は一、

sonno mak,

イーキアニカー アエランペウテッノ

iki=an hi ka a=erampewtek no

ソナーノ フレー かぼちャー

sonno hure KABOCA

エネ ネノ カネ オ、アナンペ ア ネー

ene neno⁽¹¹⁴⁾ kane an=an pe a=ne

アシットマノ カネー

asitoma no kane

ウェナーニョクンヌレ アキー

wenyokunnure a=ki

ウェンカムイ マウエヘ イク、

wen kamuy mawehe iku,

かぶったんだなと おもったと

KABUTTANDANA TO OMOTTATO

全部腐ってしまったのか、

全て肉が落ちてしまった

睫毛もなくなった。

眉毛もなくなった。

髪の毛もなくなった。

髭もなくなった。

本当にどう、

したことなのか私はわからずに

本当に赤いかぼちャ

のように私はなってしまった。

私は恐ろしくなって

とてもあきれてしまった。

化け物の息吹を

かぶってしまったのだなと思った。

[鍋沢：うん。]

(112) アイヌ語沙流方言では「…の睫毛(睫毛の所属形)」をシクラフ(フ) sikrapu(hu)というが、松島氏はこの物語中(2ヶ所)で「シキラフ」と発音。1995(平成7)年8月10日に松島氏は睫毛の概念形を「シクラフ sikrap」と発音していた(音声資料:CC000337)。

(113) 査読者の指摘でローマ字の誤記 a=rarhu を a=raruhu に修正。

(114) 査読者の指摘でローマ字の誤記 nono を neno に修正。

そして もうー、もうもうもう [咳払い]、はー、

SOSITE MOU MOU MOU MOU

ヤイケウコルアン アエバカクサイー

yaykewkor=an a=eBAKAKUSAI

はた⁽¹¹⁵⁾ わ、わかいな アンペ アネフ

HATA WA, WAKAI NA an pe a=ne p

マッカ アコロ カ ソモキ

mat ka a=kor ka somo ki

ポカー アコルカ ソモキノ

poka a=kor ka⁽¹¹⁶⁾ somo ki no

エネアンー オコッコ ネノー カネ

ene an okokko neno kane

アナンペー アネ セコル ヤイヌアン ワ

an=an pe a=ne sekor yaynu=an wa

チサン コル、それから イシカルン、

cis=an kor, SOREKARA, Iskar un,

ニシパ ウタラー エキムネ ワー

nispa utar⁽¹¹⁷⁾ ekimne wa

ユク ヘネ カムイ ヘネ セワ

yuk hene kamuy hene se wa

サツパ コル チセ ソイ、チセ ソイ タ

sappa kor cise soy cise soy ta

オスルパパ ワ パイエパ コル

osurpapa wa payepa kor

ヌワフ コル アウヌフ アオナハ はー、

nuwap kor a=unuhu a=onahaha

アフフテ ワ スウェ ワ

ahupte wa suwe wa

イパロスケ コル オカ ヒネー アン

i=parosuke⁽¹¹⁸⁾ kor oka hine an

そして、もう

生きたままに屍になって後悔した。

まだ、若かった私だったが、

妻を持つこともできない

子供を持つこともできないで

このようなお化けのように

私はなったのだと思って

泣いていると、イシカリの

旦那さんたちが狩りをして

シカでもクマでも背負って

下りると、家の外に

捨てて行くと

うめきながら母や父が

それを入れて煮て

私に食事を作ってくれていた。

(115) 日本語の「まだ」を言い損なったと思われる。

(116) 査読者の指摘でローマ字の誤記 a=korka を a=kor ka に修正。

(117) 査読者の指摘でローマ字の誤記 utara を utar に修正。音節末 r の後に母音 a がついて伸びた発音。

(118) i=parosuke とローマ字表記していたところ、査読者から「i=paro suke」の形を示された。筆者は i=par osuke と解釈して修正。

ヤイエシカルンカ アナクス、
 yayasikarunka=an akusu, 気がついてみると
 ソノーノ アシットマノ カネー もう
 sonno asitoma no kane MOU 本当に怖い姿に
 アンペ アイス アネフ ネクス
 an pe aynu a=ne p ne kusu なってしまったので
 シネ わかいもの エーク イネ⁽¹¹⁹⁾、へー、
 sine WAKAIMONO ek hine, 一人の若者が来て、
 ウタラパケー、カムイ ウタラパケ
 “utarpake, kamuy utarpake 「仲間の頭、立派な首領
 ネ ノイネ アンクル エネ
 ne noyne an kur ene らしくいた者がこのように
 マク アナク エイキ ワ エネ アン
 makanak e=iki wa ene an どうしてこんなふうに
 シキラフ カ イサムー サバハ スマハ カ
 sikrap⁽¹²⁰⁾ ka isam sapaha numaha⁽¹²¹⁾ ka 睫毛もない、頭の毛も
 イサム 「咳払い」 レキヒ カ イサム
 isam, , rekihi ka isam ない、髭もない
 ラルフ カ イサムー、ペ エネ
 raruhi ka isam, pe ene 眉毛もなくなったのか。
 ほんとに オコッコ ネノ カネ
 HONTONI okokko neno kane 本当に妖怪のように
 マクアンペクス エネ エアニ アン
 mak an pe kusu ene e=an hi an⁽¹²²⁾” どうしてなってしまったのか？」
 セコル イコイピシ わかいもの シネフ
 sekor i=koypis WAKAIMONO sine p と私に訊ねた若者が一人
 アン ヒネ キ クス タブネカネー
 an hine ki kusu “tapne kane いたので「実は
 アエランペウテックノ アユスニ チフ
 a=erampewtek no ayusni cip 私はわからないでハリギリの舟を

(119) 査読者の指摘でカタカナ表記をイネと修正。筆者もイネとヒネのどちらにするか迷っていた発音。

(120) シキラフと聞こえるがローマ字表記はアイヌ語沙流方言の概念形 sikrap と記した。

(121) 若者の言葉は毛の抜けた主人公に対して言っているのだが、第2人称接辞エ e=がサバハ sapaha 「その頭」、スマハ numaha 「その毛」、レキヒ rekihi 「その髭」などから脱落。

(122) ローマ字表記を人称代名詞の形でエアニ アン eani an としていたところ、査読者から誤りを指摘されて修正。

アカル ワ、アオカー エアイカフ

a=kar wa, a=o ka eaykap

作って、乗りもしなかった。

アユスニ パッ チクニ オッタ

ayusni pak cikuni or ta

ハリギリほど、木のなかで

ウェンサンペ コル チクニ イサムペ ネ

wensanpe kor cikuni isam pe ne

精神の悪い木はなかった

ヒ アエランペウテックノ エネ

hi a=erampewtek no ene

ことを知らずにこのように

チフ アカル イネ⁽¹²³⁾、ヘー、エネ アン

cip a=kar hine, ene an

舟を作って、こんな

ヤイラムシツネ アキー ヒ ネクス

yayramsitne a=ki hi ne kusu

苦しみを味わったので

タネ オカ、は、わかいもの

tane oka, WAKAIMONO

今いる若者よ、

シサム ネ チキ アイヌ ネ チキ

sisam ne ciki aynu ne ciki

和人もアイヌも

イッテキ⁽¹²⁴⁾ イテキ アユスニ チフ アナクネ

iteki iteki ayusni cip anakne

決して決して、ハリギリの木の舟は

アカルペ ネ ナー セコル ネ わかいもの

a=kar pe ne na" sekor ne WAKAIMONO

作ってはならないぞ」とその若者⁽¹²⁵⁾が

ウパシクマ ワ はー、オンネー したから

upaskuma wa onne SITAKARA

教えを言い残して死んだということだ。

アユスニ パッ ウェン サンペ コル チクニ

ayusni pak wensanpe kor cikuni

ハリギリほど悪い精神を持った木は

イサム ルウェネクス エラムオカ ヤン

isam ruwe ne kusu eramuoka yan

ないのだから覚えておきなさい。

セコル シノ ニシパ ハウエアン セコンネワ

sekor sino nispa hawean sekor ne wa

と本当の旦那⁽¹²⁶⁾が物語ったのですと。

(123) 査読者の指摘でカタカナ表記をヒネからイネに修正。

(124) アイヌ語沙流方言はイテキ iteki「…するな」の意味を強調する際にイテッキと発音するが、松島氏はここでイッテキと発音。

(125) この「若者」が主人公なのか主人公にもものを訊ねた若者なのかは文脈からは特定できない。松島氏から未確認。

(126) 語り手によるあらすじは主人公自身の語りおさめで物語が終了しているが、アイヌ語本文では主人公以外の男性となっている。